第５章　大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開

河　田　泰　之

１．はじめに

大阪湾岸及びその周辺における土器製塩についての論考は，近藤義郎氏①，森浩一氏，白石太一郎氏②などによっておこなわれているが，現在これらの地域における製塩土器の研究の基礎となったものとしては酒井龍一氏③，広瀬和雄氏④の業績があげられる。そのうち広瀬氏の一連の論考は，土器製塩の開始からその終焉まで，その内容は多岐にわたりこの分野における基本文献といってよい。このように大阪湾岸における土器製塩についての研究は現在先学により確立されつつある分野ではあるが，本稿は大阪湾岸周辺の製塩土器の出現から古墳時代前期までを中心として編年案を提示し，それに基づく若干の考察をおこなうものである。

２．土器製塩研究の現在

製塩土器の研究の焦点は，現在既存の編年観をもとにした生産体制及び消費形態の変遷，それらの背景になるものへと移りつつある感があるが，現在のところ広瀬氏の一連の業績以降，こと製塩土器の出現期から古墳時代前期にかけての研究は，やや停滞気味の観がある。一方で，近年の資料の増加により，既存の諸説から派生する幾つかの問題点が生じている。これらの点について，それに関わる研究史をひもときつつ以下にみていくこととする。

まず，大阪湾岸における土器製塩の研究のうち，その出現期から古墳時代前期にかけての編年については，酒井龍一氏［酒井1976］，広瀬和雄氏［広瀬1994］，鈴木陽一氏［鈴木1982•1993］らの業績があげられる。

酒井氏は，弥生時代末から古墳時代前期にかけての製塩土器を，脚部の形態の差異から１類から７類に分類し，それらの年代観を，１～６類を「過渡期II」＝庄内式併行期，７類を「過渡期III」＝布留式期初頭との年代観を示し，またこれらは大まかには１～７類へと移行するが，複数が共存するとしている。また，１類の出現，つまり大阪湾岸における土器製塩の開始は，「過渡期Ｉ」＝弥生時代後期末に遡る可能性を指摘している。

広瀬氏は，当該時期の製塩土器を脚台の形状及びそれを規制する製作技法をもとに脚台Ｉ～III式まで設定している。この製作技法とは，脚台Ｉ式を体脚部分離製作技法によるもの，脚台II，III式を体脚部連続製作技法によるものとしている。また，このうち脚台Ｉ式及びIII式を２つに細分し，脚台Ｉ式は，さらに細分が可能であるとしており，その型式差は集団差・集落差に起因するとしている。これら脚台Ｉ～III式の年代観を，脚台Ｉ式を弥生時代後期後半～庄内式併行期，脚台II式を布留式期の古段階，脚台III式を布留式の中段階としている。

鈴木氏は，広瀬氏の指摘する脚台Ｉ式における型式内の多様性を，湊遺跡の調査で得た資料をもとに分類をおこなっている。氏は分類に際して，脚台の形態，脚柱部の成形技法，脚部と体部の接合方法，の３つの差異を分類の基準とし，その組み合わせにより48種の分類が可能であるとした。また，今後の検討を要するとしながらも，脚部と体部の接合方法から大まかな年代観を提示している。ここでは，中

実の脚部を成形した後，体部を巻き上げ成形するものをａ，体部脚部をそれぞれ成形した後栓状の粘土塊を充塡するものをｂ，脚部成形の後体部を巻き上げ成形するものをｃ，体部・脚部をそれぞれ成形した後接合するものをｄとし，樋口氏［樋口1984］の指摘する高坏の成形技法の変遷をもとに，ｂ類からａ・ｃへの変遷がたどれるとした。これらの年代観についても樋口氏の論考に依拠し，ｂ類＝幾内第五様式後半，ａ・ｃ類＝庄内式併行期から布留式期とし，前者を脚台Ｉ式１段階，後者を脚台Ｉ式２段階としている。

また，大阪湾岸における土器製塩と他地域との関係については，鈴木陽一氏［鈴木1993］，岩本正二氏［岩本1992］，広瀬和雄氏［広瀬1994］などの論考があげられる。

鈴木氏は，大阪湾岸における土器製塩の開始について，中部瀬戸内地域からの技術の伝播とし，その形態は故地の製塩土器をモデルにしながらも，製作技法は在地のものを採用していることから，直接的な技術の移入はされていないとする。また，これ以後も相互の交流は続くが，脚台II式の段階で，中部瀬戸内地域と大阪湾岸における，製塩土器の形態及び技法のある程度の同一性がみられることから，この時期の両地域の交流の深化を指適している。

岩本氏は，中部瀬戸内地域と大阪湾岸における製塩土器の関係について製作技法の観点から相互の交流について述べている。酒井氏の編年案をもとに，大阪湾岸で土器製塩が始まるのが庄内式の段階であり，それと同時期に吉備の児島周辺においても体部外面にタタキを採用するようになるとし，大阪湾岸との交流による技法の変革を指摘している。

広瀬氏は，大阪湾岸における土器製塩の開始について，形態の類似から中部瀬戸内地方からの影響と，とするが，体部外面の調整技法の違いからその導入形態は直接的なものではなく在地的要素の割合が比較的高いものであったとしている。

次に，土器製塩の動態から見た，土器製塩活動における政治性の介入についての主なものとして酒井龍一氏［酒井1976］，白石太一郎氏［白石1988］，広瀬和雄氏［広瀬1992•1994］，冨加見泰彦氏［冨加見1993］らの論考があげられる。

酒井氏は，和泉地方及び紀伊地方における製塩土器の出土をみる遺跡を，生産地と消費地の視点から類型化し，両地域における土器製塩活動の性格付けとその背景を推測している。まず，遺跡の類型化であるが，海岸に面し製塩炉を有し製塩土器が無数に出土する遺跡をＡ型，海岸より数㎞内陸に位置し，製塩土器の出土量が10～数100個と比較的少ないものをＢ型，海岸より数10㎞内陸に位置し製塩土器の出土は全くないか，極少数にとどまるものをＣ型とし，Ａ型を生産地，Ｂ型を二次加工に関わると考えられる集落であるが，その生産物は集落内で消費すると考えられるとし，Ｃ類を消費地としてそれぞれ仮説として提示している。これらの立地を庄内式併行期から布留式期初頭における両地域の遺跡に当てはめ，和泉地方を「生産・消費型」，紀伊地方を「生産・供給型」と推測し，紀伊地方において「政治性」への胎動が見て取れるとしている。

白石氏は，大阪湾岸及び紀淡海峡における土器製塩の開始が，古墳出現の背景となるべき広域政治連合の形成期にあたる庄内式併行期であることから，この地域の土器製塩の開始に於いて大和・河内を結ぶ政治連合中枢の意志とは無関係であったと考え難いとし，土器製塩の開始自体に政治性の存在を指摘している。

広瀬氏は，生産地と考えられる遺跡を，その立地条件から類型化し，それら諸類型の生業の違いから大阪湾岸及び紀淡海峡における土器製塩活動の諸段階の設定をおこなっている。まず，その立地条件か

ら，小河川の流域など付近に可耕地が存在するものをＡ，これをさらに海岸線付近のものをＡａ，海岸線から内陸へ２～３㎞に位置するものをＡｂ，周囲に山が控え海に面した岬などに立地するものをＢ，島嶼部に位置するものをＣとし，このうちＡを農民集落，Ｂ，Ｃを海民集落としている。氏は上記のようにその立地から類型化した各生産遺跡の動態からみた，大阪湾岸周辺の土器製塩活動における政治性の介在を論じている。なお，この政治性の介在を『収奪』とし，その収奪に四つの段階が設定できるとしている。このうち本稿に関わるのは第１段階，脚台Ⅰ～Ⅲ式の時期にあたる。この段階では土器製塩は，農業，漁業の生業の違いはあるものの大阪湾岸の多くの集落において生業の一部に組み込まれており，その流通は農業共同体内あるいは海民集団単位での範囲に収まるものであるとしている。つまり，本稿に関わる段階においては土器製塩は生業一般の範疇に含まれ，生業一般からの遊離，つまり土器製塩の専業化は認め得ないとしている。しかし，氏はこの時期違ったかたちでの権力の介在を読みとっている。愛知県清水遺跡において脚台Ⅰ式そのものが出土した事実を，当時首長層の頂点に立つ大和政権が，在地の首長に製塩集団を派遣し，それを貢納させる，つまり首長間の階層差に起因する首長ネットワークの介在の結果とし，生産地を拡大するというかたちでの塩の収奪が行われた段階とする。また専業集団の編成による塩の生産・流通を完全にその統制下におくのは，丸底Ⅰ式の出現する５世紀後半としている。

冨加見氏は，紀伊における製塩土器の出土する遺跡を概観し，広瀬編年の脚台Ⅱ，Ⅲ式において，遺跡数の増加，型式の安定化がみられることからある程度の専業性を認めている。また，この時期に塩が交易物資として重要な位置を占めるようになるとしている。脚台Ⅲ式以降では内陸からもその出土が多く見られるようになることから，この段階に於いて塩の流通網が確立し，塩の生産と供給に政治性の介入が見て取れるとしている。

これら以上の３点に関わる諸説を概観すると，以下のような相違点が浮かびあがってくる。

製塩土器の編年観については，大阪湾岸における土器製塩の開始は弥生時代後期後半から末にかけてであり，時期が下るにつれて脚部の縮小という退化傾向がみられることがわかる。しかし，３氏の編年観に若干の差異が認められる。つまり，酒井氏の５類は広瀬氏の脚台Ⅱ式にあたるが，前者は庄内式併行期に後者は布留式古段階にその年代を求め，広瀬氏は脚台Ⅰ式を弥生後期後半から庄内式併行期としているが，鈴木氏は再考の余地ありとしているものの，弥生時代後期後半から布留式期にその時期を求めている。この状況を見ていると酒井氏が指摘するように脚台式の製塩土器は共存する型式が幾つか存在するようである。

また，大阪湾岸における土器製塩の導入形態については，形態及び成形技法から各氏論考を行っている。大阪湾岸における土器製塩の開始は中部瀬戸内からの影響という意見が一般的であるが，その開始当初から，製塩土器が在地の技法を用いてつくられていることから，中部瀬戸内からの間接的な伝播であったとする広瀬氏や岩本氏と，さらにその後も両地域の交流は続き，脚台Ⅱ式の段階に於いて両地域の製塩土器の形態の類似から更なる交流の深化があったとする鈴木氏など，土器製塩の導入自体は見解が一致するものの，その後の両地域のかかわり合いについて若干の解釈の相違が見られる。

次に，土器製塩における政治性の介入についてであるが，生産地と消費地相互の分析から，古墳時代前期まで和泉地方においてその傾向は見られず，大阪湾岸よりその開始時期が若干遅れる紀伊地方に於いてその傾向を認める酒井氏や，脚台Ⅱ，Ⅲ式に於いてある程度の専業化を指摘し，脚台Ⅲ式に於いて流通網をも統括するとする冨加見氏，生産地の分析から，開始当初から政治性の介入が一部みられるが，

この時期を生産地の拡大の段階とする広瀬氏，当該時期の時代背景から大阪湾岸における土器製塩の開始自体が政治力の介入によるものとする白石氏というように様々な解釈が見られる。

本稿においては大阪湾岸における出現期から古墳時代までの土器製塩活動について，上記の諸説相違が見られる3点について，若干の私見を述べることとする。

3．編年

ここでは，主に和泉地域において出土する製塩土器をもとに編年作業を行い，随時，河内地域などの資料でそれを補完する事とする。つまり，下田遺跡での調査成果に加え，出土量が多い和泉地域の資料により基礎資料の編成をおこない，出土量は少ないが土器編年上における相対的位置や他地域との併行関係が比較的つかみやすい河内地域などの資料でそれを補完する。なお，これら上記の作業を行うにあたり，下田遺跡の土器編年案を踏襲することとする。また，編年作業にあたり，まず系譜の抽出をおこなうが，本稿では各系譜の型式変化を図示するにとどめ型式設定はあえておこなわない。また抽出した各系譜相互に共存関係が一部見られることから，それら各系譜の相関関係を編成しそれらを様相として捉えることとする。

3－1．系譜の抽出

今回，検討の対象となる資料は，出現期から古墳時代前期までのものである。以下では，製塩土器を系譜という視点から見ていき，それらの各系譜の相関関係が表出する状況を様相という概念で編成することとする。

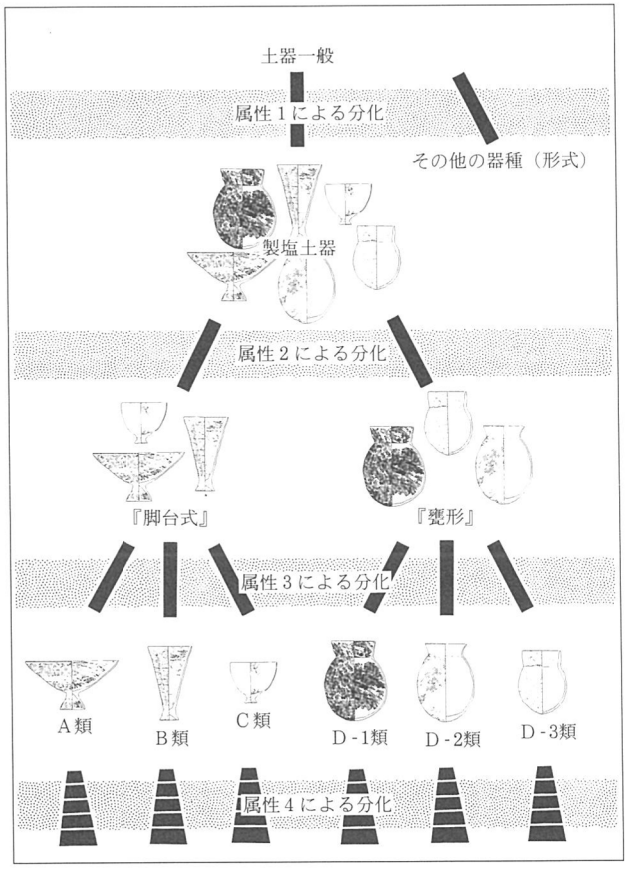


Fig.409　諸属性と系譜

なお，ここで型式設定をせず，系譜論にて論考していくが，この時期の製塩土器の各型式の変異の幅が大きく，既存の資料では型式設定が究極には困難であることと，型式設定したとしても，ある一定の時期に併存する型式が複数みられ，この型式の重複という事実を，系譜という視点からみていきそれら系譜間の相関関係を様相として捉えることが，ある一定解釈するのに妥当な方法と考えるからである。

まず，以下に系譜の抽出をおこなう。ここでは系譜の抽出の際，指標となる属性に階層を設け，それに基づき作業を進めることとする。

なお，各階層ごとに抽出の指標となる属性の規定概念については，以下作業を進める際に，各階層ごとにふれることとする(Fig.409)。

属性1

いわゆる『形式の識別』にあたる。この際の『形式の識別』の基準となるものを以下に記す。

一般に製塩土器とその他の形式を抽出する際の基準となる，器壁外面に二次焼成を受けた痕跡があり，白色の付着物がみられるもの，あるいはその個体自体は前記の属性がみられずとも，同様の形式に於いてそのような類例のみられるもの。また，そのような属性がみられずとも，その形態という属性を積極的に解釈する事によってそれとみなすことが可能なもの。

これにより，Fig.411の甕形を呈するものを二次焼成及び白色付着物の存在から，またFig.410（１～５）の形態を積極的に解釈した結果から，それぞれ製塩土器とする。

属性２

形態を重視した形式の差異によって，以下の２つの系譜が抽出できる。なお，この段階で抽出の基準となるものは，後に述べるが機能差に起因する可能性が高い。

・体部に比べ小さい脚部がとりつくもので一般に『脚台式』［広瀬1978］と呼ばれるもの。
・口縁が一般のものに比べて，比較的まっすぐ立ち上がるもので，甕形を呈するもの。

属性３

成形技法によって規定される形態の差異によって抽出されるもの。この段階における作業は，製塩土器の諸属性のうち，『精神的範型』［Deetz1963］，広義の『志向』［赤塚1990］を抽出する段階といえる。つまり，この属性３の段階で抽出の際の指標となる属性は，ある一定の時間的，空間的広がりをもつ技術的伝統といえる。その基本概念として，製塩土器の形態の構成要素は成形技法によって規制されるものとし，その成形技法はある技術的伝統に規制されるものと捉える。その技術的伝統は，先にふれたようにある一定の時間的，空間的な広がりをもつ。つまり，この段階で抽出される系譜は，一定の技術的伝統を有する，時間的広がりをもつ集団または地域集団を表すものととらえることができる。

このような属性をもつものを抽出すると，脚台式のものから典型的なものを３系統，また甕型のものから同じく３系統抽出できる。

Ａ類　体部・脚部ともにやや内湾しつつ大きく開く。また，脚部は，他の類に比べしっかりしている。つまり，外面には，タタキやごく少数ではあるがナデが，内面には横方向のハケメや板ナデが施された脚部に，体部を巻き上げていく手法で成形されるもの。なお，体部外面にはタタキが，内面にはハケメもしくはナデが施されている。

Ｂ類　ほぼ直線的に開く体部に，脚裾の短い脚部がつく。体部は外面はタタキがみられ，内面にハケメやナデを施すものがみられる。脚部には，指頭痕がみられ，脚裾をつまみ出す。

Ｃ類　大きく内湾しつつ広がる体部に，脚裾の短い脚部がとりつく。体部外面は，タタキやハケメ，ナデを施すものがみられ，内面はナデがみられる。脚部には，指頭痕がみられ，脚裾をつまみ出す。

Ｄ類　甕型を呈し，Ａ～Ｃ類とは形式を異にするが，器壁外面が二次焼成を受け赤変し，白色の付着物が見られるなど製塩土器の特徴をもつ。山内紀嗣氏［山内1994］などがその可能性を指摘しているもの。このＤ類は，この段階で少なくとも，以下の３つに細分できる。

Ｄ－１類　器壁外面をハケメで仕上げ，内面にもそれが見られるものもある。尖底で口縁が逆「ハ」

の字状に立ち上がるものと，丸底で口縁がやや内湾するものなどがある。

D－2類　外面にタタキメがみられ内面は板ナデが見られるもの。尖底で口縁がやや内湾するもの，同じく尖底で口縁が逆「ハ」の字状に立ち上がるものなどがある。

D－3類　丸底を呈し，内・外面に板ナデが見られる。

属性4

型式の設定にあたる。属性3より更に下位の技術的伝統であり，この属性自体は，属性3に内包されるものである。つまり，形態及びそれを規制する成形技法自体は属性3において同一の範疇としてとらえることができるが，細部における成形技法に若干の差異のみられるもの。

具体例を挙げると，A類においてこの状況が顕著にみられる(Fig.410，1～17)。属性3の段階ではA類としてとらえることができるが，これらの成形技法のうちの微細な差異，つまり中空の脚部に円盤充塡をおこなうものと，三角錐状の脚部を成形した後体部を巻き上げていくものなど，成形技法の差異やそれらに規制される形態及び法量の差異がみられる。このように，同様の技術的伝統をもつもののなかでも，細部において若干の差異がみられるが，この差異が型式を表すものと捉えることができる。

また，これらの差異は，ある程度の時期差を有するものの，一定の共存関係があると考えられる。つまり，同一系譜内で，ある一定の共時性を有する複数の型式が存在するということである。これを型式の変異の幅とし，これら同一系譜内での，型式の変異は，地域集団を構成する各集落，あるいは各集落内の個人差に起因するものと考えている。また，後に述べるが，各系譜において型式の変異の幅が相対的に異なると想定できる。

以上，この段階において型式の設定がある一定可能であるが，本稿では行わずこの段階における属性の存在を指摘するにとどめる。

3－2．系譜と時間的序列

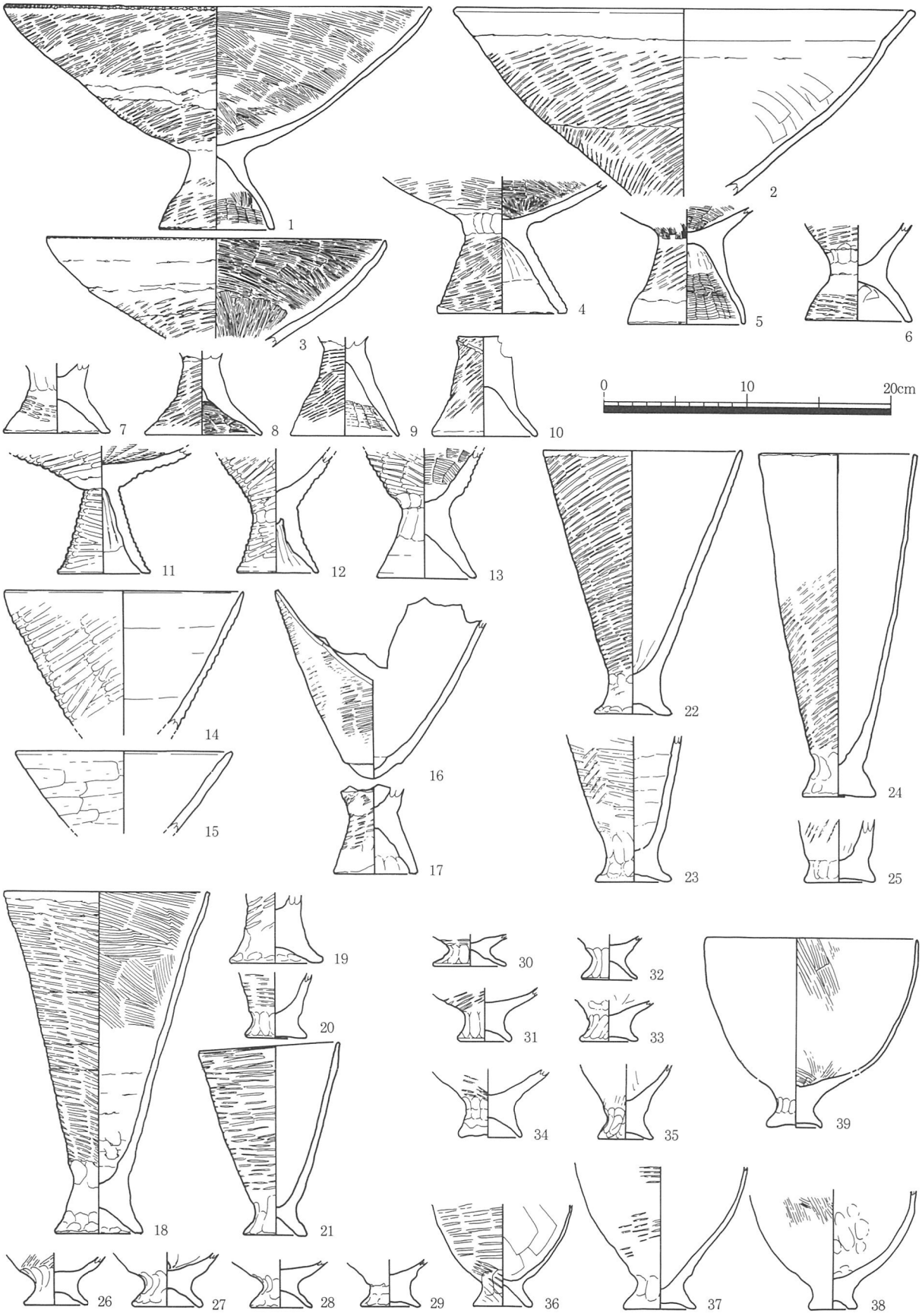
さて，つぎにこれら各系譜の時間的序列について，下田遺跡における土器編年案をもとに周辺遺跡の例を挙げながらみていくこととする(Fig.410・411)。

A類(Fig.410．1～17)

確実な相対的年代がわかる資料として，下田遺跡ＳW1157【下田Ⅰ－2】，下田遺跡ＳA2218【下田Ⅰ－4】，下田遺跡ＳW1159【下田Ⅱ－1】，豊中古池遺跡拡張部南北トレンチ【下田Ⅱ－2新相】などが挙げられる。また，下田遺跡ＳD2206，古池北遺跡大溝の資料のように，やや法量が小さいものの製塩土器と考えられる資料もみられる。これらのことから，A類はおおむね弥生時代後期後半から庄内式併行期の後半に位置付けられる。

B類(Fig.410．18～25)

確実な相対年代のわかる資料として，西大路遺跡533－ＯＸ【下田Ⅱ－1】が挙げられる。また，おおかまな年代観をつかめる資料として以下のものが挙げられる。大久保Ｅ遺跡ＳＲ－1の資料は，時期幅が考えられるが，庄内式併行期後半に位置付けてよいと考えられ，また脇浜遺跡91－ＯＲの資料は，これも時期幅が考えられるが，庄内式併行期末から布留式期初頭に位置づけることができる。これらのことから，B類は庄内式併行期初頭から布留式期初頭に位置付けられる。



Ａ類（１～17）・Ｂ類（18～25）・Ｃ類（26～39）

Fig. 410　製塩土器の分類（１）

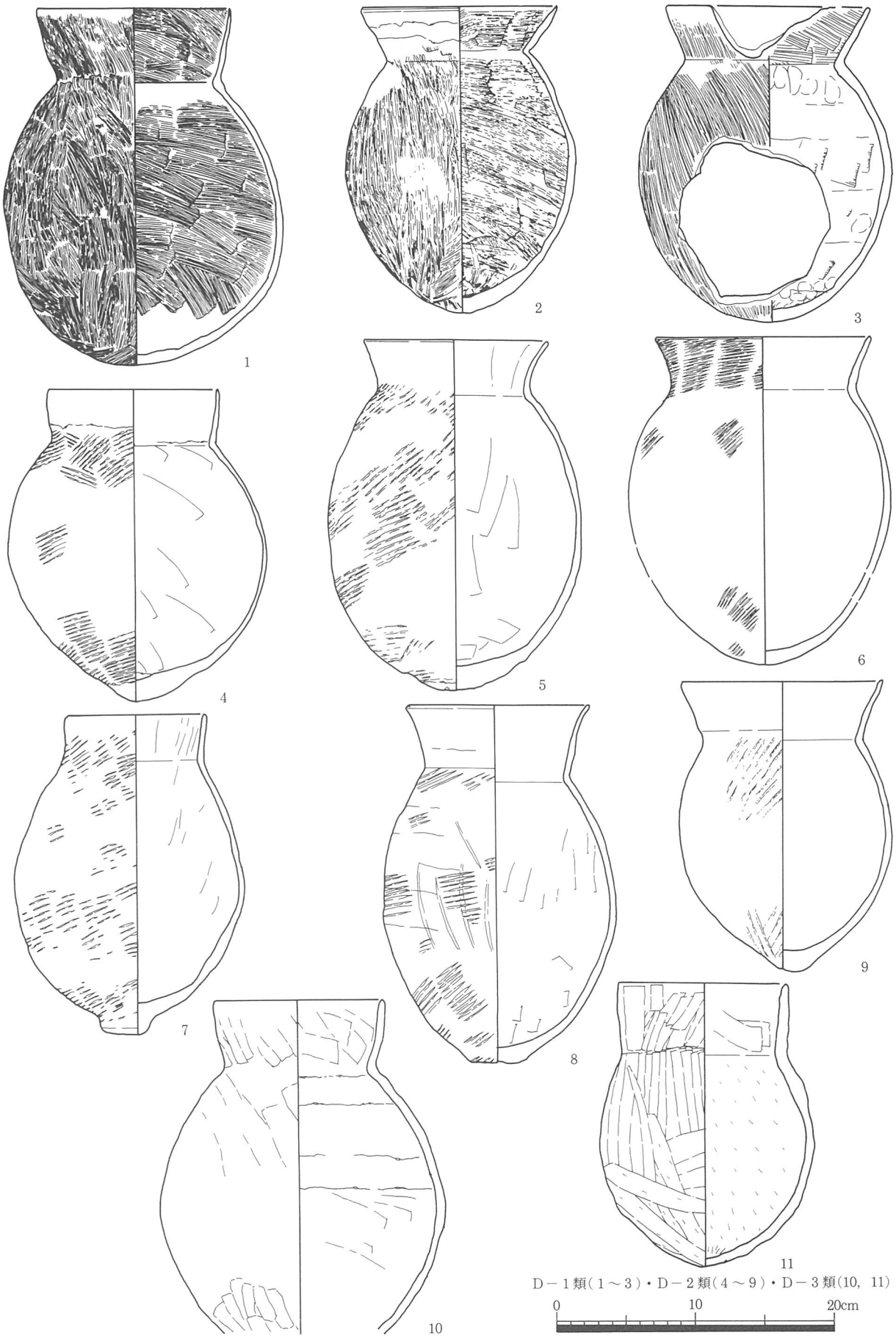


Fig. 411　製塩土器の分類（2）

Ｃ類(Fig.410. 26～38)

確実な相対年代のわかる資料として，下田遺跡ＳＤ1108，萱振遺跡ＳＥ－03【下田Ⅲ】などが挙げられる。また，脇浜遺跡91－ＯＲも，それに前後する資料として位置づけられる。なお，現時点の和泉地域における資料では，布留式期初頭にその初現を見るが，河内地域における様相は若干異なる。つまり，小阪合遺跡Ａ－３ａ区落ち込み７，船橋遺跡井戸５はいずれも庄内式期に位置づけられており，このことから，その出現が遡る可能性が多分にある。この，両地域におけるＣ類出現のタイムラグは今後の資料蓄積が解決するものと考える。

Ｄ－１類(Fig.411. １～３)

確実な相対年代のわかる資料として，下田遺跡ＳＤ1108，萱振遺跡ＳＥ－03，船尾西遺跡ＳＫ－001【下田Ⅲ】などが挙げられる。これらは，いずれも布留式期初頭に位置づけることができる。

Ｄ－２類(Fig.411. ４～９)

確実な相対年代のわかる資料として，下田遺跡ＳＤ1108，萱振遺跡ＳＥ－03【下田Ⅲ】，平城宮朝集殿下層ＳＤ6030のものが挙げられる。なお，河内地域の編年で庄内式期後半とされる船橋遺跡井戸４でも同様のものが見られることから，その初現が若干遡る可能性が指摘できる。

Ｄ－３類(Fig.411. 10. 11)

確実な相対年代のわかる資料として，七ノ坪２第二地点のものが挙げられる。これは，【下田Ⅲ】より一型式新しいもので，平城宮朝集殿下層ＳＤ6030の資料に併行する。

３－３．編年試案の提示

ここでは，上記の作業で抽出した各系譜それぞれの相対年代とその存続期間を見ていき，また各系譜の相関関係を様相という概念で編成し，現時点での大阪湾岸の出現期から布留式期における製塩土器の編年案を提示することとする。また，おおよその型式変化の方向性は図示している通りである(Fig.412)。

大阪湾岸における土器製塩は，Ａ類をもって開始した。当初の系譜であるＡ類は，畿内第五様式後半初頭には確実にその出現をみ，庄内式併行期後半までその系譜をたどることができるが，それ以降の時期に帰属する資料が見られないことから，この事実を系譜の断絶ととらえる。なお，このＡ類における型式変化は，体部開きの鋭角化，脚部の縮小傾向などで，土器全体のつくりが粗雑化していくことなどがあげられる。また，このＡ類は，庄内式併行期の段階に於いて多様化を見せる。つまり，湊遺跡のように，形態，成形技法の違いから，数十種にわたる細分が可能であるほどであり，またFig.410. ４～17を見てもわかるようにその型式は安定していない。

Ｂ類は，庄内式併行期初頭に出現する。直線的に開く体部と簡略化されたつくりの脚部で，同時期のＡ類とは明らかに系譜を異にする。このＢ類は庄内式併行期初頭には出現し，庄内式併行期全般において見られる。なお，確実な資料はないが脇浜遺跡の例から一部布留式期初頭まで存続すると考えられる。このＢ類も，これ以降の資料が見られないことから，この事実を系譜の断絶ととらえる。なお，このＢ類の型式変化は，体部開きの鋭角化，脚部の縮小化，脚部内高の低下化，脚部つくりの簡略化などで辿ることができる。

Ｃ類は，和泉地域の資料によると，少なくとも布留式期初頭にはその初現を見る。半裁卵形の体部を持ち，小さくとりつく脚部を持ち，前述のＡ・Ｂ類とは系譜を異にする。なお，広瀬氏［広瀬1994］によると，このＣ類は少なくとも５世紀後半までその系譜が存続するようである。このＣ類における型式

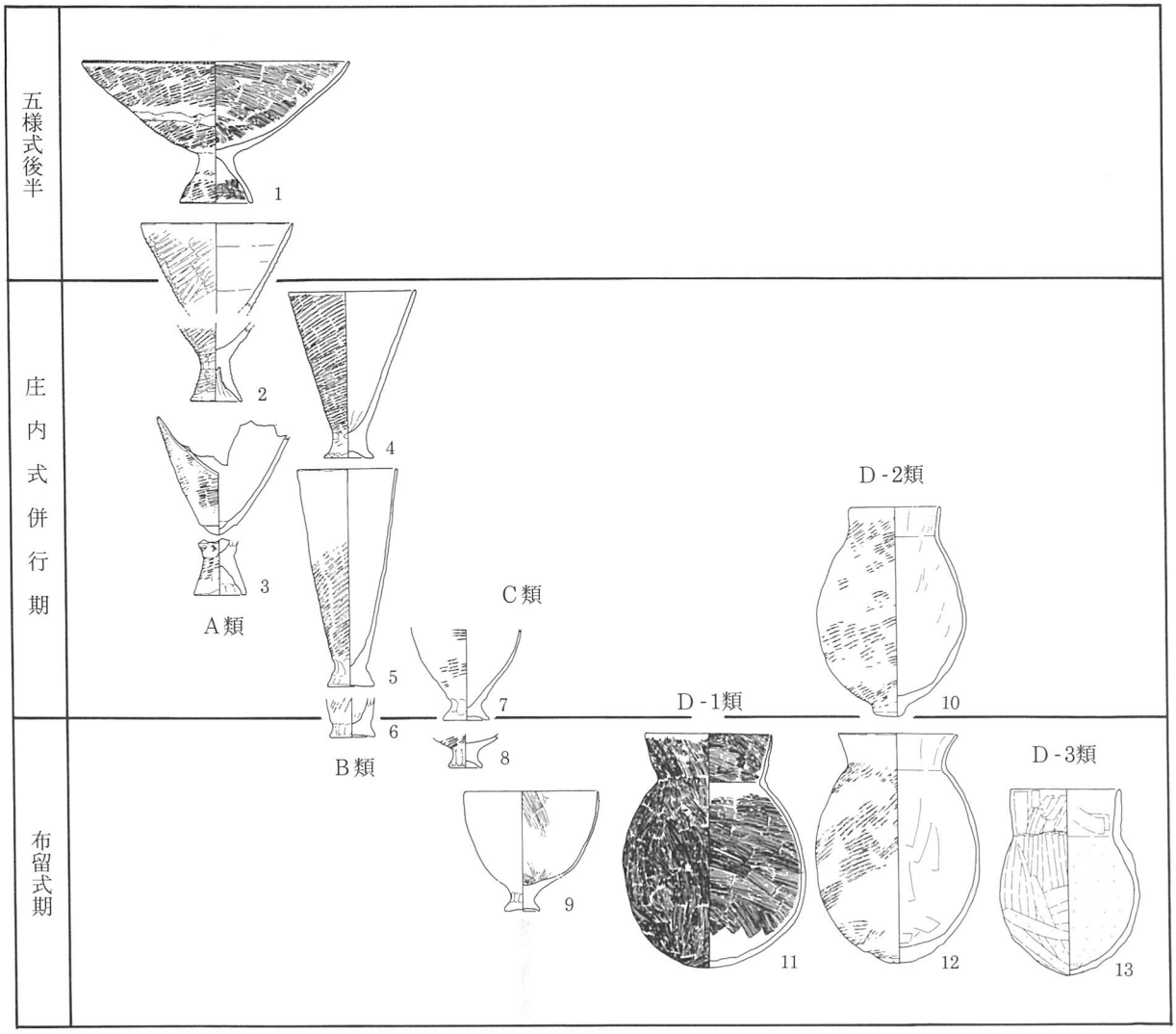


Fig. 412　大阪湾岸における製塩土器編年案

変化は，脚部の縮小化，タタキメやハケメを有するものなどからナデへという体部外面の調整の画一化によって辿ることができる。また，このC類は前述したとおり，和泉地域より河内地域の方が，その出現が遡るようで，この事実を積極的に解釈しC類の出現を庄内式併行期に想定しているが，このC類の出現時期については今後の資料蓄積を待ちたい。

従来の製塩土器とは形式を異にするD類は，少なくとも布留式期初頭には存在している。なお，このD類の系譜が，これ以降断絶するのか，また広瀬編年の甕形Ⅰ式［広瀬1994］までその系譜を辿ることができるのかは，今後の課題としたい。また，この系譜は，体部外面の調整の違いにより，それぞれD－1～3類に細分できる。これらの型式変化は，D－2類の例を参考までに挙げると，丸底化，直立する口縁から逆「ハ」の字に開く口縁へと変化していくが，この型式変化がD類全般に適応できるかどうかは今後の資料の蓄積を待ちたい。

以上のように，A～D類の各系譜は，同時期に併存するものも見られる。本稿では，明確な型式設定まで行っておらず，大まかな型式変化の方向性を提示したのみであるが，その作業的展望として以下のことを指摘しておく。

まず，上記の製塩土器の各系譜における型式に変異の幅があり，しかもその変異の幅に差異が想定されることである。つまり，A類では，広瀬氏［広瀬1994］の指摘するとおり，同じ系譜においても比較

的同時期と考えられる資料に於いて，成形技法，細部の形状の差異が見られるというきわめて多様な様相を呈し，型式設定すれば型式の変異の幅の存在も当然予想されるという点である。この傾向は，庄内式併行期に前後する時期においてみられるようで，Fig.410. ４～10や湊遺跡［鈴木1982］の資料などを見ると明らかである。また，Ｂ・Ｃ類もＡ類に比べ安定はしているが，同様の傾向を看取できる。これらの詳しい解釈については今後の課題としたい。なお，ここで各系譜における変異の幅の多寡を模式的に表すとＡ類＞Ｂ類＞Ｃ類という図式で想定できる。

次に，先にもふれたとおりこれら各系譜の共存関係が表出する状況を様相という概念で編成することとする。各系譜の共存関係は，庄内式併行期前半においてＡ類とＢ類が，布留式期初頭を前後する時期にＢ類，Ｃ類，Ｄ類が，布留式期前半にＣ類とＤ類がそれぞれ共存している。これらの状況を様相として捉え編成すると以下のようになる。土器製塩の開始以降，弥生時代後期後半においてＡ類のみ見られる状況を「様相１」とする。続く庄内式併行期前半には，既存のＡ類に加え庄内式併行期初頭に出現するＢ類が共存しておりこれを「様相２」とする。庄内式併行期後半にＡ類が消失し，庄内式併行期末から布留式期初頭には，既存のＢ類及びＣ類に加え，Ｄ類が出現するが，これを「様相３」とする。次に布留式期初頭のある時点において，Ｂ類は消失しＣ類及びＤ類のみとなり，これを「様相４」とする。

４．大阪湾岸及び紀伊半島の土器製塩活動の動態

ここで，上記の編年作業において明らかとなった事実を整理しておこう。まず，大阪湾岸における製塩土器は，同一系譜上における型式変化という図式には還元することはできず，少なくとも４つの系譜に分かれる。また，上記の４つの系譜，Ａ～Ｄ類はそれらのうちの複数において同時併存する時期があるということである。つまり庄内式併行期前半に於いてＡ類とＢ類が，布留式期初頭を前後する時期にＢ～Ｄ類がそれぞれ共存するということである。さらに，各系譜における型式に変異の幅がそれぞれ見られるが，特にＡ類にその傾向がみられるということである。なお，推測ではあるが，その傾向はＡ類＞Ｂ類＞Ｃ類と表せることを指摘した。

また，各系譜間の共存関係を様相として以下のように編成した。

「様相１」＝弥生後期後半，Ａ類のみ見られる。

「様相２」＝庄内式併行期前半，Ａ類に加えＢ類が出現する。

「様相３」＝庄内式併行期後半から布留式期初頭，Ａ類は消失し，Ｂ類に加え，Ｃ類及びＤ類が出現する。

「様相４」＝布留式期前半，Ｂ類は消失しＣ類及びＤ類が見られる。

これらのことをふまえ，ここでは第一に大阪湾岸における製塩土器の各系譜の出自，つまり当地に製塩活動における独自性を見いだせるのか否か，第二に土器製塩活動の動態の推移について，製塩土器の出土する遺跡の類型化をおこない各系譜，各様相ごとにみていくこととする。

まず，はじめに前述のＡ～Ｄ類，つまり弥生時代末から古墳時代前期にかけて大阪湾岸で一般にみられる製塩土器の各系譜は，当地においてその起源を求め得るものか他地域からの影響によるものか，という問題であるが，各系譜毎にみていくこととする。

Ａ類の出現，つまり大阪湾岸における土器製塩の開始は中部瀬戸内地域からの影響によるとするのが一般的であり，筆者も同様の立場をとる。しかし，大阪湾岸の初現期の製塩土器と同時期の中部瀬戸内地域の形態が明らかに異なる点は，今後再考すべき問題といえよう。

それに対し，Ｂ類は中部瀬戸内からの影響がＡ類に比べ顕著である。つまり，庄内式併行期における両地域の製塩土器を比較すると，体部の形状は異なるものの，脚部の形態，成形技法に類似がみられる。また，Ｂ類とおおよそ同時期と考えられる岩本編年の第３類Ａ１［岩本1992］から，体部外面にタタキメが施されるものが出現する。つまり，庄内式併行期に，大阪湾岸で中部瀬戸内地域の影響下にＢ類が出現するが，一方，中部瀬戸内ではこの時期の大阪湾岸地域との接触によりタタキメが新たな体部成形の手法として一般化していく。岩本氏［岩本1992］や鈴木氏［鈴木1993］の指摘するとおり，この時期の大阪湾沿岸と中部瀬戸内地域との間に双方向の手法，技法の交流があった。

Ｃ類は，その形態は細部の差異はみられるものの比較的画一的なものとなる。それ以前に大阪湾岸で主流であったＢ類とは明らかに系譜が異なり，この布留式期初頭におけるＢ類の消失という系譜の断絶，Ｃ類への系譜の変換から大阪湾沿岸地域の出自とは考えにくく他地域からの影響下に出現したものと考えた方が合理的のようである。なお，このＣ類は布留式期を中心とした時期に瀬戸内海沿岸，北部九州，山陰地方などで一斉に出現する系譜であることから，この時期のＣ類への変換は広域に見られる傾向であり，大阪湾沿岸もその影響下にあったことが指摘できる。

Ｄ類は，現在のところ大阪湾沿岸，大和盆地においてのみみられる系譜で，現時点では他地域において類例は見られない。ただ，製塩土器と認知され始めたばかりであるため，以後類似した資料が他地域においてみられるようになる可能性がある。このような資料的制約のもとに，その出自を求めることは本稿では行わず今後の課題としたい。

次に製塩土器が出土する遺跡の分布とその推移から，弥生時代後期から古墳時代前期における，製塩活動の動態についてふれることとする。まず，製塩土器の出土する遺跡を，供給地か被供給地なのか，また生産地であれば生業一般における土器製塩活動の占める位置など，その立地から想定し以下のように類型化する。

Ⅰ類　可耕地がひらけ，かつ海岸線から５㎞前後の範囲に立地する。主に農耕などに生業のおもきをおくと考えられるが，漁労具も出土する遺跡もあること，海岸までの距離が日常の活動範囲と考えられることなどから，製塩活動を行っていた可能性は否定できない。

Ⅱ類　可耕地がほとんどない岬部の海岸線近くに立地する。可耕地の狭小さ，漁労具の出土する遺跡が多いことから漁労をその生業の主体としていたと考えられる。

Ⅲ類　海岸線から数十㎞内陸に立地することから，生業一般に製塩活動を組み込むことは不可能と考えられ，明らかに被供給地と考えられる。

Ⅳ類　島嶼部に立地し，漁労活動に生業のおもきをおくもの。

以下に，上記の出土遺跡の類型における，製塩土器の各系譜ごとの出土傾向をみていくこととする。

Ａ類の分布は，泉州，紀淡海峡，播磨灘東部においてみられるが，おおよそ泉州北部に集中している。一般にⅠ類，つまり可耕地の広がる小河川下流域に位置する集落に於いて出土するが，Ⅱ類で出土するのは小島東遺跡，加太遺跡，深山遺跡など数少ない。また，明らかに被供給地として考えられるⅢ類は，寛弘寺遺跡のみで本格的な内陸部への供給はこのＡ類では看取できない。また，このＡ類は大阪湾岸における土器製塩の初現となる系譜であるが，その中でも型式学的に古い様相を呈するものとしては，下田遺跡，加太遺跡［河内・大野・土井1986］の資料が挙げられる。この泉州北部と紀淡海峡で開始した土器製塩は，その後泉州北部においては出土遺跡の増加から，ある一定の土器製塩活動の展開を見るが，紀淡海峡付近では，小島東遺跡，深山遺跡など，その拡大範囲が前者に比べ小規模である。また，播磨

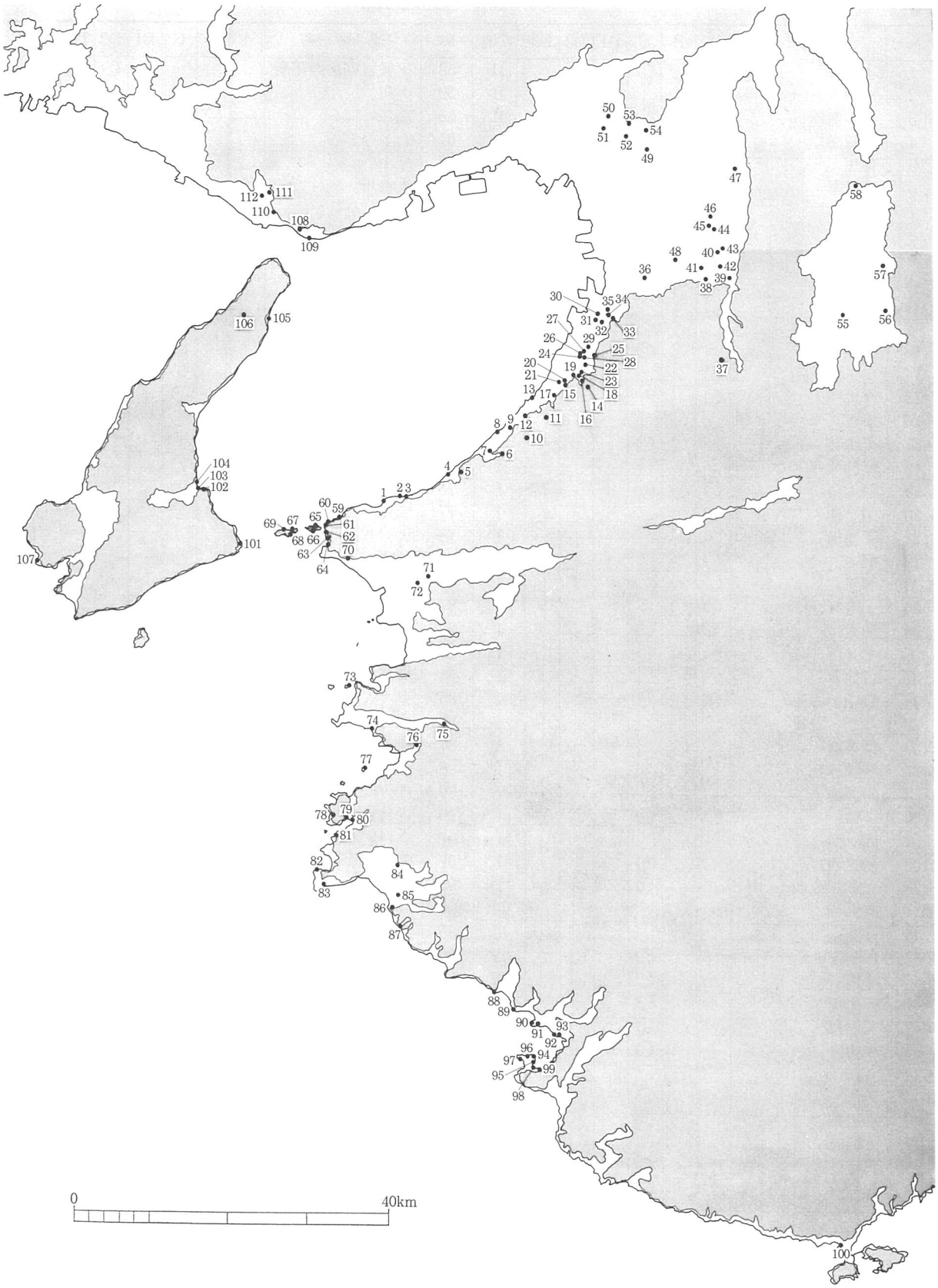


Fig. 413　弥生時代後期後半から古墳時代前期における製塩土器出土遺跡

Tab.38　製塩土器出土遺跡

No.	遺　跡　名	A	B	C	D1	D2	D3	立地	No.	遺　跡　名	A	B	C	D1	D2	D3	立地
1	小島東	○	○	○				II	58	平城宮朝集殿下層				○	○		III
2	淡輪	○						II	59	大川		○	○				II
3	山田海岸		○	○				II	60	藻江		○	○				II
4	尾崎海岸			○				I	61	しょうぶ谷	○	○	○				II
5	男里	○	○	○				I	62	深山	○	○	○				II
6	三軒屋	○	○	○				I	63	大谷川	○	○					II
7	諸目	○	○					I	64	加太	○	○	○				II
8	松原		○	○				I	65	藻崎北浜			○				IV
9	湊	○		○				I	66	藻崎西方		○					IV
10	大久保		○	○				I	67	一谷色		○					IV
11	名越西	○						I	68	拍の谷		○	○				IV
12	沢共同墓地			○				I	69	神島		○	○				IV
13	脇浜		○	○				I	70	西庄			○				I
14	山ノ内	○						I	71	太田・黒田			○				I
15	今木	○						I	72	鳴神地区		○	○				I
16	小田		○	○				I	73	地の島	○	○	○				IV
17	土生	○	○	○				I	74	津井浜		○					II
18	軽部池西			○				I	75	田殿・尾中		○	○				I
19	西大路	○	○					I	76	野田・藤並		○	○				I
20	栄ノ池	○						I	77	鷹島		○	○				IV
21	下池田	○						I	78	大引II		○					I
22	府中	○						I	79	三宅谷			○				II
23	和気	○						I	80	阿戸	○		○				II
24	上町	○	○					I	81	方杭		○	○				II
25	伯太			○				I	82	阿尾			○				II
26	七ノ坪	○		○			○	I	83	三尾		○	○				II
27	古池北	○						I	84	東郷		○					I
28	豊中・古池	○	○					I	85	東大人		○					I
29	池上・曽根	○						I	86	尾の崎		○					II
30	伽羅橋		○					I	87	祓井戸		○					II
31	羽衣砂丘		○					I	88	大目津泊りI		○	○				II
32	水源地		○					I	89	森の崎		○					II
33	下田	○	○	○	○	○	○	I	90	古目良		○					II
34	四ッ池		○					I	91	立戸岩陰		○					II
35	船尾西			○	○			I	92	磯間岩陰		○	○				II
36	大和川今池			○				I	93	神子浜			○				I
37	寛弘寺	○						III	94	坂田山		○					II
38	津堂						○	III	95	江津良B		○					II
39	船橋			○		○		III	96	田尻浜		○					II
40	小坂合			○				III	97	瀬戸		○	○				II
41	八尾南			○				III	98	東白浜		○					II
42	東弓削			○				III	99	網不知洞穴		○					II
43	中田			○				III	100	笠島		○	○				II
44	萱振			○	○		○	III	101	高崎			○				II
45	若江			○				III	102	宮崎		○					I
46	西岩田		○	○				III	103	旧城内		○	○				I
47	北新町					○		III	104	山下居屋敷			○				I
48	瓜破北			○				III	105	今出川		○					II
49	崇禅寺			○				I	106	舟木			○				I
50	利倉西			○				I	107	伊毘	○						II
51	島田			○				I	108	舞子・東石ヶ谷	○						I
52	五反田			○				I	109	垂水・日向		○	○				I
53	蔵人			○				I	110	池上・口ノ池	○						I
54	垂水南			○				I	111	新方		○					I
55	矢部		○					III	112	吉田南			○				I
56	纒向		○	○		○		III									
57	布留					○	○	III									

灘においても若干みられる。

Ｂ類はＡ類と比べその分布範囲は拡大している。大阪湾南岸，紀淡海峡，播磨灘東部に加え，紀伊半島西岸，淡路島にまでその分布は拡大している。このＢ類が出土する遺跡を，この型式学的に見てみると，古い様相を呈するものは西大路遺跡，下田遺跡など泉州北部に集中するようで，泉南，紀淡海峡付近，紀伊半島など他の地域ではやや新しい型式のものが主流となっている。また，矢部遺跡，西岩田遺跡などの，Ⅲ類つまり被供給地と考えられる遺跡においても出土するが，それらは型式学的に新しいものである。これらのＢ類の分布域の拡大を，型式学的変化と共にみていくと，Ａ類と同時併存していた頃は，泉州北部にその分布が集中していたものが，庄内式併行期後半以降，淡路島，紀伊半島西岸までにその分布範囲を広げ，Ｂ類による製塩活動の展開に伴い，内陸への塩の供給がみられるようになったといえる。つまり，庄内式併行期末頃に紀伊半島西岸において極めて短時間のうちに製塩活動を行う集団が展開し，ほぼ同時期に内陸部への供給が微量ではあるが始まった事実は，この時期の生産集団の展開が，内陸部の需要に対応するためのものであったといえる。

Ｃ類はここで扱う各系譜の中で，最も広範囲に分布し，地域間の分布密度の格差が乏しい。つまり最も広範囲に，均質に分布するといえる。細かくみていくと紀淡海峡及び紀伊半島，また，内陸では河内においても増加し，新たに摂津においても出土しており明らかに分布域の拡大がみられる。また，庄内式併行期において分布密度の高かった大阪湾南岸において，遺跡数がやや減少し，全体的にほぼ均質に分布するといえる。このことは，このＣ類において出土遺跡の急増した地域の存在が前提となるが，特に河内潟縁辺の内陸に位置する遺跡群で多く分布するようになる。これら被供給地と考えられる遺跡からの出土が急増することから，このＣ類が広範囲に分布するようになる布留式期初頭をもって，本格的に内陸の被供給地へ供給が開始したといえる。

Ｄ類の分布は，泉州北部，河内潟縁辺，大和盆地の遺跡などで，他のものに比べ報告例が少ない現在判断するのは多少危険ではあるが，他の系譜に比べ最も内陸の被供給地で出土する割合の高いものといえるであろう。年代としてはこのＤ類は庄内式併行期末から布留式期において出現し，Ｃ類と併存している。なお，Ｃ類及びＤ類は共にⅠ，Ⅲ類の遺跡において出土するが，Ｃ類はⅡ，Ⅳ類においても出土している。つまり，Ｃ類は出土遺跡のすべての類型から出土するのに対し，Ｄ類はⅠ類の一部とⅢ類，生産地の一部と被供給地にその分布が限られる。この同時期における分布の差異は，Ｄ類による生産を行う集団の出現と考えるより，流通過程においてＤ類により製塩工程のうち焼き塩などの一部分が行われた，つまり生産用具である製塩土器の地域性と捉えるより，流通過程においてＤ類による二次加工がおこなわれるようになったことに起因すると想定している。

これら各系譜毎の出土状況とその変遷を各様相にあてはめると以下のようになる。

「様相１」＝泉州平野部及び紀淡海峡を中心とする地域において，前者は農耕集団，後者は漁労集団によってそれぞれ土器製塩活動がおこなわれていた。内陸部における出土は一例であることから，その流通は近接する集落間などの小規模なもので広範囲には及んでいなかった。

「様相２」＝先の地域に加え播磨灘，淡路島などにおいても土器製塩がおこなわれるようになる。また，Ｂ類が泉州に平野部を中心とした地域においてみられるようになる。土器製塩活動をおこなう集団は，以前と基本的にはかわっておらず，その流通も同様に小規模なものである。

「様相３」＝Ａ類の系譜が消失するが，遺跡数の減少は認められず，またＢ類の普及がすすみ，製塩土器がＡ類からＢ類へと変換した段階といえる。紀伊半島西岸において出土遺跡は急増し，泉州の平野部においては遺跡数の減少が見られ，被供給地である内陸の遺跡での出土が急増する。

「様相４」＝Ｂ類が消失しＣ類及びＤ類のみとなり，紀伊半島西岸において遺跡数が若干減少するが，基本的には前段階となんら変化はない。なお，Ｄ類は泉州北部，河内潟縁辺，大和盆地の一部の遺跡においてのみ見られるもので，Ｃ類と比べるとその分布に偏りがある。

５．生産と供給の諸段階

以上，前節では大阪湾沿岸においてみられる製塩土器の各系譜は，資料不足であるＤ類以外は，それぞれ他地域からの影響下に成立した可能性が高いと想定できるとした。つまり，出現期から古墳時代前期にかけての大阪湾岸における土器製塩活動は，独自性に乏しく，絶えず他地域に影響されつつ行われていたものといえ，それ故複数の系譜が共存する結果となったことを指摘した。

また，弥生時代後期後半に始まった大阪湾岸の土器製塩は，「様相１」の段階では泉州と紀淡海峡付近において行われていた。製塩活動を行う主体は出土遺跡の立地条件から，農耕を行う集落がほとんどであり，その流通範囲も近隣の地域に限られ，一般的には内陸などの遠隔地に運ばれることはほとんどなかった。また，「様相２」の段階におけるＡ類は，その形態に多様性が看取できる。このことは，当時各集落なり共同体で個々に製塩活動が行われていた，つまり生業一般に土器製塩が組み込まれており，土器製塩自体が一般的なものとして行われていたことに起因すると想定できる。「様相３」の段階には，紀伊半島西岸において極めて短期間のうちに，数多くの遺跡で土器製塩が行われるようになる。これは，同じ頃内陸において少しずつではあるが，供給されつつあることから，何らかの要因による需要の拡大の結果，生産地の急増が見られたと捉えうる。また，この頃には，泉州の平野部における土器製塩活動は，出土遺跡の減少から，下火になっているようで，自給自足的な製塩活動が紀伊半島西岸の新出の生産遺跡にみられるような供給主体のものとなってきた。つまり，泉州の平野部の遺跡などの旧来の平野部における各集落は生産地から被供給地へと一部変化していったと考えられる。これにややおくれてＣ類が広く分布するようになるが，少なくともこの時期には内陸への流通が一般的となり，製塩活動は自給自足型から，一部の生産集団による供給へと急速に変化していき，それに伴う流通網も完備されはじめたと考えられる。「様相４」の段階において，生産地及び供給地である遺跡に大幅な増減が見られないことから，前段階で整備確立した土器製塩の生産及び流通形態は一時的なものではなく，安定して機能し続ける。つまり，前段階において土器製塩の生産及び流通形態は短期間のうちに完成されたといえる。

以下はこれらのことを踏まえ，生産と供給の諸段階の設定とその要因についてふれることとする。

【第一段階】

「様相１」及び「様相２」の段階。弥生時代後期後半に泉州，紀淡海峡において中部瀬戸内の緩やかな影響のもと土器製塩が始まり，庄内式併行期以降，紀伊半島西岸の北部，淡路島東岸，播磨灘などにおいても土器製塩が行われるようになる。また，庄内式併行期になって新たな系譜であるＢ類が中部瀬戸内地域の影響下に出現し，庄内式併行期後半にはＡ類ととって変わり，一般的に用いられるようになる。なお，この庄内式併行期後半におけるＡ類からＢ類への系譜の変換は，製塩土器の製作時における能率化を求めた結果と考えている。またこの際，その背景にどのような要因があったのかは製塩土器だ

けで論じることは困難であり今後の課題としたい。

この段階の土器製塩は，平野部の農耕集落や一部にその存在が想定できる漁労集団などの生業一般に組み込まれるかたちで行われていた。この段階においては，内陸部などの遠隔地において製塩土器が出土することは希であり，分布範囲は海浜部またはそれに近接した平野部の集落にほぼ限定できる。以上のことから，生産された塩の流通範囲は狭小であり，自給自足的な生産を行っていた可能性が高く，内陸などの遠隔地へ供給するようなことはほとんどなかったと考えられる。つまり酒井氏［酒井1976］の言う「生産・消費形」の製塩活動であったといえる。このような状況からすると，この段階の土器製塩活動には政治性の介入の可能性は低いと考えられる。

【第二段階】

「様相３」及び「様相４」の段階。庄内式併行期末頃になると，Ｂ類の分布範囲が急激に拡大する。この傾向は特に紀伊半島西岸において顕著に見られ，この地域に製塩集団が極めて短期間のうちに急増したと考えられる。また，それに呼応するかたちで河内潟縁辺や大和盆地の内陸部においても製塩土器が見られるようになる。この事実は，需要の急激な増加に対応する生産地の増加と考えられ，この傾向はＣ類の出現と共にさらに顕著になる。Ｃ類は，生産地と考えられる紀淡海峡付近，紀伊半島西岸においてやや出土遺跡が減少するものの全体的にその分布範囲は広く，内陸部特に河内潟縁辺において多く出土するようになる。つまり，生産地の拡大が見られ，一方で被供給地たる内陸部への供給が急増する事実の背景には，なにより流通網の整備確立が不可欠であり，しかもその生産及び流通体制の整備確立を比較的短期間のうちになしえた主体が存在したことを示す。また，やがて新たな系譜であるＤ類も見られるようになるが，このＤ類の出土する遺跡は泉州北部と河内潟縁辺や大和盆地の内陸部に分布し，またそれらの遺跡においてＣ類も共存することから，Ｄ類の用途については資料的制約もあり，あくまで仮説ではあるが，Ｃ類と同じく煮沸に用いると考えるより，焼き塩などの二次加工に用いられていたと考えている。すなわち，流通過程においてこの甕形の容器に詰め換え，焼き塩作業を行い内陸部の被供給地へと供給するという製塩工程の分化が見られたのではということである。さらにこの仮説に添ってこの段階における塩の流通形態について論を進めると，生産地で作られた塩がある特定の集落，地域の核となるようなところに運ばれ，そこで二次加工の後，消費地である集落へ供給されていたと想定できる。つまり，布留式期初頭において，従来の流通形態とは別に，新たな流通形態が加わるという，塩の流通形態の重層化を想定している。また，古墳時代前期初頭の大阪湾岸周辺においてみられる生産地の急増と，被供給地への一定量の流通は，この地域にのみ見られる傾向ではない。というのも主に瀬戸内海沿岸を中心として西日本各地においてＣ類による土器製塩がほぼ一斉に開始することから，この時期，生産地の拡大は西日本を中心としたかなり広範囲にみられる大きな広がりをもっていたことがわかる。この広範囲で短期間における土器製塩活動の展開と，内陸の被供給地への一定量の供給の開始，それらを可能とする流通網の整備確立，という事実の背景に一定の政治性の介入があった可能性は極めて高い。

６．まとめ

本稿では，出現期から古墳時代前期における大阪湾岸周辺の製塩土器の編年案を提示し，当該時期における大阪湾沿岸，紀伊半島西岸，淡路島などの地域における製塩土器出土遺跡の分布傾向をもとに，生産・流通・その要因などについての指摘をおこなった。これらの概要と，今後の課題についてふれることとする。

6．まとめ

大阪湾岸周辺における出現期から古墳時代前期までの製塩土器は，４つの系譜がありその年代は，Ａ類が弥生時代後期後半～庄内式併行期後半前後，Ｂ類が庄内式併行期初頭～布留式期初頭，Ｃ類及びＤ類が庄内式併行期後半頃，Ｄ類が布留式期初頭頃とした。これら多系譜の存在の要因を他地域からの影響のもとに製塩活動がおこなわれていた結果によるものとし，この地域の土器製塩活動が極めて受動的なかたちで行われていた結果とした。また，各系譜は型式学的に不安定なものもあり，それぞれ型式に変異の幅があり，かつそれに差異が見られ，その差異は模式的にＡ＞Ｂ＞Ｃと表せることを指摘した。また，庄内式併行期前半にＡ類とＢ類が，庄内式併行期後半にＢ類とＣ類が，布留式期前半にＣ類とＤ類がそれぞれ共存することを指摘し，この共存関係をもってＡ類のみが見られる弥生後期後半を「様相１」，Ａ類及びＢ類の見られる庄内式併行期前半を「様相２」，Ｂ類，Ｃ類及びＤ類の見られる庄内式併行期後半から布留式期初頭を「様相３」，Ｃ類及びＤ類の見られる布留式期前半を「様相４」とした。

しかし，ここで編年に際しての分析方法の曖昧さ，資料的制約など論考自体不完全なまま論を進めている部分もある。まず，編年における系譜の抽出に際する属性の設定，その要因については，本来客観的事実に即して言及すべき問題であるが，編年作業を通して筆者が抱いた作業的仮説としてあえて提示した。また，各系譜における大まかな型式変化の方向性を指摘し，系譜毎に型式の変異の幅が相対的に異なることを指摘したが，これも同様のことが指摘できる。ここで提示した編年案については，前述の作業をもって再考していくべきであろう。

次に，製塩土器出土遺跡の類型を行い，上記の編年案をもとにその分布傾向から生産と流通について論考をおこなった。この地域の出現期から古墳時代前期にかけての土器製塩活動には二つの段階が見られ，出現期以降，庄内式併行期後半まではいわば農耕集落もしくは一部の漁労集団による「生産・消費形」の土器製塩がおこなわれており，泉州の平野部を中心に盛んにおこなわれていたが，庄内式併行期末以降，おもに紀伊半島西岸において生産地と考えられる遺跡が急増し，それにやや遅れて被供給地である内陸への一定量の供給が見られるようになった。この生産地の急増，被供給地への一定量の供給，それを可能にする流通網の整備確立は，その背景に政治性の介在があったためであるとし，この傾向は瀬戸内海を中心とする西日本各地においてみられ，広範囲にその影響が見られることを指摘した。

しかし，これらのうち生産集団の性格については，その立地からだけではなく共伴遺物などを含めた比定が必要であろうし，こと流通形態については，胎土分析などによる産地同定等の客観的資料の提示が不可欠といえる。また，塩の生産と流通における政治性の介在については，製塩土器のみでは状況証拠の提示に終始する感もあり，当時の時代背景や他の政治的色合いの強い製品を含めた多角的視野から見た生産・流通形態全体からの論考が必要であろう。

［1996.12.稿了］

［謝辞］

本稿をまとめるにあたり，石橋広和，岡　一彦，岡田直樹，仮屋喜一郎，上林史郎，角南聡一郎，城野博文，中岡　勝，広瀬和雄，前川　淳，森屋直樹，山田隆一（敬称略）などの各位にご指導，ご教示を賜った。また，大阪府文化財調査研究センター藤田憲司氏，仁木昭夫氏，西村　歩氏においては，拙い内容ではあるが論考の場を与えていただいたこと。また，西村氏においては下田遺跡の資料観察等やその他資料の提供などを快諾していただき，また土器編年観や内容についてのご指導を賜るなど，格別のご配慮を賜った。文末ではあるが記して感謝の意を表したい。

［注釈］

①近藤義郎　1964　「古目良遺跡」『田辺文化財』八号　田辺市教育委員会
近藤氏は，目良式Ａ類と目良式Ｂ類とに分類し，弥生時代後期のある時点において大阪湾東岸から紀伊半島南端にかけてほぼ一斉に目良式Ｂ類による土器製塩活動が開始したとしている。

②森浩一・白石太一郎　1968　「紀淡・鳴門海峡における考古学調査報告」『同志社大学文学部考古学調査報告』第二冊
紀淡海峡一帯の資料をもとにＡ～Ｇ類に分類し，この地域一帯における土器製塩活動の開始は，弥生時代中期後半にさかのぼる蓋然性を指摘した。

③酒井龍一　1976　「和泉における『伝統的第五様式』に関する覚え書き」『豊中・古池遺跡発掘調査概報その３』

④広瀬氏の一連の論考として以下のものが挙げられる。
広瀬和雄　1978　「小島東遺跡」『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会
広瀬和雄　1988　「近畿地方における土器製塩」『考古学ジャーナル』298
広瀬和雄　1992　「大阪湾岸と三河湾岸の土器製塩」『弥生文化博物館研究報告』１
広瀬和雄　1994　「大阪府」『日本土器製塩研究』青木書店

［文献］

赤塚次郎1990「土器・土器群の形成」『廻間遺跡』㈶愛知県埋蔵文化財センター
岩本正二1992「弥生時代の土器製塩」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社
岩本正二1994「奈良県」『日本土器製塩研究』青木書店
泉大津市教育委員会1982『七ノ坪遺跡発掘調査概要・II』
泉佐野市教育委員会1982『湊遺跡発掘調査報告』
泉佐野市教育委員会1993『湊遺跡90－４区の調査』
泉佐野市教育委員会1993『塩の古代史講演会資料』
和泉市教育委員会1975『上町遺跡発掘調査概要』
和泉市教育委員会1978『府中遺跡発掘調査概要・II』
和泉市教育委員会1988『府中遺跡群発掘調査概要・Ⅷ』
㈶大阪市文化財協会1991『長原遺跡発掘調査報告Ⅵ』
大阪府教育委員会1974『七ノ坪遺跡発掘調査概要』
大阪府教育委員会1978『大園・古池北遺跡発掘調査概要』
大阪府教育委員会1983『萱振遺跡発掘調査概要・Ⅰ』
大阪府教育委員会1987『寛弘寺遺跡発掘調査概要Ⅴ』
大阪府教育委員会1986『中田遺跡発掘調査概要』
大阪府教育委員会1992『津堂遺跡』
㈶大阪府埋蔵文化財協会1986『脇浜遺跡発掘調査報告書』
㈶大阪府埋蔵文化財協会1988『西大路遺跡発掘調査報告書』
㈶大阪府埋蔵文化財協会1989『山田海岸遺跡発掘調査報告書』
岡本　稔，波毛康宏1994「兵庫県（淡路島）」『日本土器製塩研究』青木書店
貝塚市教育委員会1989『名越西遺跡発掘調査概報』
柏原市教育委員会1993『船橋遺跡』
河内一浩・大野左千夫・土井孝之1986「和歌山県」『海の生産用具』埋蔵文化財研究会
岸和田市遺跡調査会1975『土生遺跡第２次発掘調査概要』
岸和田市教育委員会1977『土生遺跡発掘調査概要』
堺市教育委員会1978『船尾西遺跡発掘調査抄報』
酒井龍一1976「和泉における『伝統的第五様式』に関する覚え書き」『豊中・古池遺跡その３』
鈴木陽一1993「脚台式製塩土器について」『湊遺跡90－４区の調査』泉佐野市教育委員会

白石太一郎1988「製塩」『弥生文化の研究第10巻　研究の歩み』雄山閣
大東市北新町遺跡調査会1986『大東市北新町遺跡第１次発掘調査概要報告書』
豊中・古池遺跡調査会1976『豊中・古池遺跡発掘調査概報そのIII』
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告X』1980
樋口吉文1984「第83地区出土の土師器について」『四つ池遺跡』堺市教育委員会
広瀬和雄1978「小島東遺跡」『岬町遺跡群発掘調査概要』大阪府教育委員会
広瀬和雄1988「近畿地方における土器製塩」『考古学ジャーナル』298
広瀬和雄1992「大阪湾岸と三河湾岸の土器製塩」『弥生文化博物館研究報告』１
広瀬和雄1994「大阪府」『日本土器製塩研究』青木書店
冨加見泰彦1993「紀伊における土器製塩の現状と課題」『古文化談叢30集(中)』
埋蔵文化財研究所1986『海の生産用具』
益田雅司1994「和歌山県」『日本土器製塩研究所』青木書店
八尾市教育委員会1987「萱振遺跡発掘調査概要」『八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書II』
㈶八尾市文化財研究会1987『小阪合遺跡』
山内紀嗣1994「製塩土器の新例」『天理参考館報』第七号
山本三郎1994「兵庫県(播磨・摂津)」『日本土器製塩研究』青木書店
和気遺跡調査会1979『和気』
Deetz, James1963 Invitation to archaeology, 関　俊彦訳『考古学への招待』雄山閣1988

［図出典］

Fig.410.　1～10・18～20・26～29. 下田遺跡, 11～15. 湊遺跡, 16・17. 豊中古池遺跡, 21・22. 西大路遺跡, 23・25・34・35・39. 脇浜遺跡, 24. 大久保遺跡, 30～33. 萱振遺跡, 36・37. 小阪合遺跡, 38. 船橋遺跡

Fig.411.　1・4～6・10. 下田遺跡, 2. 船尾西遺跡, 3・8萱振遺跡, 7. 船橋遺跡, 9. 平城宮発掘調査報告, 11. 七ノ坪遺跡

Fig.412.　1・10～12. 下田遺跡, 2. 湊遺跡, 3. 豊中・古池遺跡, 4. 西大路遺跡, 5. 大久保遺跡, 6・9. 脇浜遺跡, 7. 小阪合遺跡, 8. 萱振遺跡, 13. 七ノ坪遺跡

かわた　やすゆき（泉南市教育委員会）